

## 『種田山頭火―詩と散文』

アレクサンドル・ドーリン訳

ヒュベリオン出版  
サンクト・ペテルブルク

最近のロシアの本はじつにお洒落な装丁になったものだ。新書判ながら唐草模様に縁取られたブルーのハードカバーにキリール文字と縦書きの山頭火の署名が漢字で刻まれている。ロシアでの日本文学人気は以前から非常に高いから、発行部数三千のこの本はもはや書店で入手することはできないだろう。「日本古典文庫」シリーズの十九冊目にあたる本書は、ロシアにおける山頭火の最初の紹介である。訳者のドーリン氏は、「古今集」から谷川俊太郎、吉増剛造まで精力的に日本の詩歌を紹介してきており、韻文の翻訳にかけてはロシアでは定評がある。この書はなんとこのシリーズで七冊目のドーリン訳である。まずは氏の势力的な仕事振りに敬意を表しておこう。

酒をこよなく愛し、生涯を行乞の旅でくつた孤高の俳人山頭火は、最近でこそ根強い人気があるが、再評価がはじまったのはそう昔のことではない。本書には各句集から選ばれた五百ほどの俳句と最晩年の「一草庵日記」が収められており、訳者による二十ページほどの解説と、ロシア人読者には理解不能と思われる語句（詩における音を重視する訳者は日本語の原音を時折のこしている）の訳注がつ

けられている。

しかし芭蕉以来の定型を排した山頭火の俳句をロシア語に訳すのはかなり難しかったはずだ。ロシアの詩は韻律を重視した定型詩がほとんどだから、それになじんだ読者に山頭火の破格の、であるがゆえに瞬間の詩情がほとぼる句の魅力は伝えづらい。そう思っただけで本書を繰ると、随所に訳者の苦勞のあとが見えてくる。この際救いとなるのが融通無碍なロシア語である。なにしろ語順は自由、感情の機微をあらわす同義語、愛称、卑称、指小形がふんだんにあるからだ。訳者はこうした豊穡な言語の海から山頭火の生死の境を越えたところで発せられる言葉の重さ（いや軽さか？）を的確に伝える語を周到に選び、それをコラーージュのように二行、三行に配置する。その試みはおおむね成功しているといえよう。それはなによりも訳者が俳人の境位に身を置くことにとめていたからだろう。

極限までそぎおとした言葉の断片のような山頭火の句は、詩を読むことに慣れているロシアの読者にとっても大きな衝撃にちがいない。そしてこの衝撃は、「一草庵日記」を読むことで一層身に滲みてくるだろう。経済的混乱のなかでロシアの知識人はかつてなかった清貧の生活を強いられるいるのだから。自殺未遂のあと、死場所をもとめて旅に出、その末に松山の寺に庵をむすんで極貧のなか、酒と句作だけを生きた山頭火の飾るところのない日記は、読者に生きる力を与えることだろう。しかもその根底には禅の思想、とりわけ自然観、宇宙観があるからなおさらである。ロシア人には破滅の淵で見えてくるものに感応する能

力がそなわっているといってもいい。

発表するあてもなく綴られたこの日記には、身辺のことども、嘆き節から、突然高邁な哲学、詩学へと飛翔する作者の心の軌跡が赤裸々に表出されている。「アル中の兆候・・・途上句を拾う、タバコの吸いさしを拾う」こういう破天荒な組み合わせに、読者は引き込まれていくだろう。しかしこうした日常と非日常が一見脈絡もなく並列される文章には、翻訳する際、思わぬ落とし穴があるものだ。抽象的な思索や詩論、事実関係の記述には注意をばらうものだが、日本人にとってはなんの変哲もない表現がかえって怖い。たとえば「焼松茸で一杯やりたいなあ！」が「ああこの茸を焼いて、腹一杯食べられたらなあ！」となつているのは明らかに誤訳である。他の箇所では「一杯やる」は「酒を飲む」の意味に訳されているから、これは訳者の思いこみがそうさせてしまったのであろう。この種の誤訳はわれわれもよくするから、それを逐一あげつらうことはつづしもう。ただ日本文学紹介のトップランナーと自他ともに認めるドーリン氏にあえて言いたいのは、日本の固有名詞の読みには細心の注意を払う必要があるし、仕事を急ぎすぎて良寛と道元を誤記するようなことはしてはならないということである。

それはともかく、日本文学の粹ともいふべき短歌や俳句がロシア文学の沃野にしみ込み、どのような発酵力をもたらずかたのしみである。かつてジャポニズムが「銀の時代」の詩人たちに衝撃を与えたように。

(渡辺雅司)

